

Wellness & Medical Care

子どもの「食育」を考える



「子ども食堂」における
共食の果たす役割とは？

「子ども食堂」という名の、日本の新たな「食」のコミュニティが全国的な広がりを見せているのをご存じでしょうか。地域ボランティアや自治体が、無料または低料金で子どもに食事を提供する場所です。2012年に東京都大田区の「きまぐれ八百屋だんだん」さんがはじめたこの活動は、2016年に319カ所だったものが、2019年には10倍の3718カ所、コロナ禍の2021年でも6007カ所にまで増加しており、利用者も160万人を越えているそうです。

「子ども食堂」の始まりは、相対的貧困状態にある家庭の小学生以下の子どもたちを対象に食を支援する活動でしたが、今では利用する子どもとの親や一人暮らしの高齢者も集まって楽しく食事をする「共食」の場となっています。高齢者や若い世代の一人暮らし、一人親世帯での子どもたちだけの「孤食」は、生活圏でのコミュニケーション低下につながります。特に、社会行動が制約されがちなコロナ禍にお



東京農業大学国際食料情報学部
国際食農科学科教授

古庄 律 先生

1989年5月より同学に勤務。同短期大学部栄養学科教授などを経て、2019年4月より同学国際食料情報学部国際食農科学科教授。農学修士、博士(農芸化学)。

／ 東京農業大学 ／

総合農学の観点からSDGsの課題解決に貢献する国内外のあらゆる教育・研究を展開。地球の豊かな未来に貢献できる人材を育成している。

<https://www.nodai.ac.jp/>

ける人とのコミュニケーション不足が、さまざまな事件に結び付いていると考えられています。子どもから高齢者まで、生活困窮状態にない人でも、住民同士で会話とコミュニケーションを増やし、楽しく食事をする「共食」体験を通して、地域交流の輪を広める機会を増やす重要性が、令和3年度からの第4次食育推進基本計画にも盛り込まれています。

2019年、日本の「子ども貧困率」は13・9%で7人に1人(人口にして280万人)と、ここ数年にわたって改善が見られませんが、OECD(経済協力開発機構)加盟国の中でもワースト10に入っています。日本の将来を担う子どもたちを、家庭だけでなく地域全体で見守り健全な体と心を育てていくのも「子ども食堂」の大切な役割かも知れません。「子ども食堂」やフードバンクを通じた多様性のある食環境づくりは、まさに食育の目指すところです。食育活動も「新たな日常」に対応した時代に突入しているのではないのでしょうか。

情報誌 **M-i-S-M-O** 4月号に掲載されています

